

二〇二四年六月一四日

やや熱き足湯に浸かり暑に耐ふる  
水鏡滑るがごとくあめんぼう  
苗床に声かけ朝の水手向く  
清流に画架を立てたる夏帽子  
夜ふかしの帳尻合はす昼寝かな

よし女  
かえる  
千鶴  
風民  
うつぎ

二〇二四年六月二三日

迷路めく紫陽花寺の径めぐる  
草を引く隣家の影の失せぬ間に  
真つ白な雲よぎりゆく代田かな

こすもす  
よし女  
むべ

二〇二四年六月二二日

初鯉ひと振り土佐の天日塩  
のぞき見る瀬々の玉藻の涼しさよ  
放ちやる闇の蛍の行方かな  
大岩の苔を絞りて滴れる  
草を引く蕾のあるは残しけり  
山法師真白きべール纏ふごと

うつぎ  
明日香  
うつぎ  
澄子  
なつき  
みきえ

二〇二四年六月二一日

揚羽蝶園の花壇をジプシーす

よし女

二〇二四年六月一〇日

万緑を砦としたる古刹かな  
紫陽花寺見渡す三百六十度  
汗拭いて喉を潤すグリーンティー

せいじ  
こすもす  
千鶴

雲の峰東西険を競ふごと  
宇治川の堰たぎり落つ涼しさよ  
風波に溺れそうなる早苗かな

きよえ  
千鶴  
みきお

二〇二四年六月九日

沢音の響き蛍の夜となりぬ  
脱稿し古茶の渋みをふふみけり  
透明のビニール傘を洩る緑  
水皺の生まれては消ゆ植田かな

風民  
むべ  
せいじ  
よし女

二〇二四年六月八日

久闊の友をもてなす新茶かな  
湧き水の走る岩肌軒忍  
竹落葉舞ひて風道を教へけり

あひる  
むべ  
むべ

毎日句会みのる選・二〇二四年六月一六日